アルゼンチンにおける「失踪者の文化」の一側面:
二つの「回復」から見る喪の可能性

石田智恵（早稲田大学）

１．はじめに：「失踪者」とその文脈

- 「失踪者（行方不明者）desaparecidos」
  - 正規軍・特殊部隊等によって拉致・強制連行され「消された」人々
  - 冷戦期、非常事態下でおこなわれた反政府・社会主義革命運動弾圧の手法のひとつ
  - 「逮捕・失踪者 detenidos-desaparecidos」「政治的失踪者 desaparecidos políticos」[1]とも
  - グアテマラ内戦初期に導入→ 1970 年代にチリ、アルゼンチンで体系化
    → ウルグアイ、ブラジル、ペルーなどでも多くの犠牲者（cf. コンドル作戦）

- 拉致後、多くは秘密裡に殺害され遺体は身元特定不可能（困難）なかたちで処分される＝殺人罪が成立しない・・・「例外状態における主権的な暴力としての殺人」[アガンベン 2003: 33]のひとつの例
  → 「失踪者」＝「剥き出しの生」状態からの死・・・死政治的実体？
  cf.「同一性を奪われた死」[Crenzel2008]・ cf.「ジェノサイド」とも（“ホロコースト”との類比）

- 20 世紀後半ラテンアメリカの政治経済情勢・・・冷戦、キューバ革命、「国家安全保障ドクトリン」と低強度戦争、新自由主義の“実験”的導入、国際的な軍事関係（ナチス、CIA、米軍・仏軍 etc）

- 人々の日常生活における（国家）暴力の全面化・・・「暴力の文化、死の空間」の只中にあってその再生産に抗する人々の振る舞い、対抗言説の生産を記述することの重要性[タウシグ 1996]

※アルゼンチンでは：

- 失踪者の数は「3 万人」が定着・・・象徴的数値（所説・論争あり）
- 軍政下の支配的言説では「ゲリラ＝犯罪者」「共産主義者」「転覆活動分子」こそ罪人
  ・・・・・・「対国家転覆活動戦争」（≒汚れた戦争）の不可避の帰結という位置づけ
- 「失踪者とは**不可知のもの**」「生きてもいないし死んでもいない。対処のしようがない。消えてしまったのだ」（強制失踪作戦の事実上の主導者、ビデラ大統領）
  cf.「あいまいな喪失」[ボス 2005]
- 建国以来アルゼンチン史を貫く支配と内戦⇒最後の軍政[2]（1976-83 年、通称「プロセソ」）下の弾圧は、繰り返されてきた「国家テロリズム」の最先鋭化とも[Bayer 2013]
- 国家機構（法務省人権局）など公的文脈を含め、現在の公共の言説における「失踪者」とは広義の「国家テロリズム（非合法弾圧）の犠牲者」とほぼ同義であり、そこには**死者（殺人の被害者）も含まれる**　　※現在は訴追可能

---

[1] 「強制失踪 desaparición forzada」は国際刑事裁判所ローマ規定上（98 年採択、02 年発行）の「人道に対する罪」の一つに数えられる。

[2] 文民-軍事政権 el gobierno cívico-militar とも呼ばれる。軍政期前後との連続性も指摘されている。

２．「死の儀礼」論からみた失踪者

- 近親者にとってそれまで直面したことのない名指し得ない事態――「喪失」だけが明白
  →「通過儀礼」の不在→「通過」できない（「過渡」の引き延ばし）［ファン・ヘネップ 2010；メトカーフ＆ハンティントン 1996］＝「死の領域」［内堀 1997］が暴力的に開かれたまま閉じられない
  ＝ 喪が明けない・・・「未完結の死」［Da Silva Catela 2001］
  →・確立されない「もうひとつの死」・・・対抗イデオロギーの生成［内堀・山下 2006：155-157］

- 生の宙づり、日常生活から締め出された状態、不安・不信・絶望が支配的
  ＝死権力/死政治［Mbembe2003］・・・生に対する死の過剰、「生」の「死」への服従

- 正当性、正義の問い、罪と罰の問題
  →（代替的）喪の作業は加害者に対する「告発」を含む
  → 失われた個人に向けては何がおこなわれるのか

３．「失踪者」への儀礼としての「人権運動」

- 「人権組織」[3]の多くが失踪者の親族という属性に基づく→「母」「祖母」「きょうだい」「子ども」

- 「五月広場の母たち」（スライド）…人権運動の可能性を開き牽引してきたパイオニア：
  （当初は）自然発生的な連帯・行動（誰かの家に集まる、境遇を共有、捜索の相互協力）
  → 儀礼的実践：毎週木曜の旋回デモ[4]（白いネッカチーフ、スローガン、失踪者の顔写真）
  →「母たち」の印以外は他の運動に引き継がれる
  →「記憶・真実・正義」のスローガンは 2000 年代～左派政権下で国策に

- 「人権運動」における「失踪者」の①特殊性・②個別性・③集合性 の表示

  ①スローガン：「生きたまま奪われた、生きて返せ」、「忘れない、許さない、和解しない」
  ・・・取返しのつかない生／死の返還を求める ＝行われた不正義の不可逆性に根差す構え

  ②顔（写真、肖像画）、名前、失踪した日付を掲げる・・・奪われた同一性の表示
  →スライド

  ③ 母たちの談話/言説・・・「全ての失踪者は私たちの子どもだ」[5]、「死者はいらない。死者は闘争を個人のものにするから」、「我々の子どもたちは無数の名前を持っている。いくつもの名前、その全ては我々の名前だ」、「我々の子どもたちは日々新たに生まれている／毎週木曜に復活する、そうして我々とともに日々生きている」［Madres 2010］

・・・徹底して「失踪」＝不在・非「死」にこだわる →「不可知のもの」自体を告発の言語に変える

---

[3] 強制失踪（を含む国家）の暴力とその不処罰を訴え告発する運動はこう総称される。
[4] 大統領府前の「五月広場」のモニュメントの周囲をぐるぐると回る抗議デモ。現在も続けられる。
[5] 「母たち」の一人 Azucena Villaflor（本人も「失踪」）のことばとして運動のなかで繰り返し引用されている。

➢ 「失踪者」の儀礼：不在者を現前させる

《繰り返される形式：表記（記録）》

■失踪通知 Recordatorio →スライド

- 死亡通知に似た形式：新聞（など）に**繰り返し**掲載（定期的）
- 掲載項目・・・顔写真（ないこともある）、氏名、失踪の日付、失踪時の年齢、失踪した場所など。失踪した日や誕生日などに合わせて掲載を依頼する
- 墓を持たない親族にとって年に一度特定の日付に失踪者を想起する年中行事
- 媒体の性質→（失踪者当人と同時に）不特定多数の人々に向けて、当該の失踪者個人に限らず「失踪者」問題全体への認識・思考を促す意図が含まれる

■敷石 Baldosas →スライド

- 失踪通知と同じ内容（写真を除く）が記載された石板が、その「失踪者」のゆかりの場所に埋め込まれる（市民団体による）→スライド
- ナチズムに関する記憶装置「つまづきの石」と同じく、不特定多数の見知らぬ人の目にふれることが重視されている点でも失踪通知と同じ意図・効果
- 歩道の敷石の一部＝都市の一部として残る・・・次世代への記憶の継承という意味も[6]

《繰り返される形式：発話（パフォーマンス）》

A："¡Treinta mil detenidos-desaparecidos!"	A「3 万人の逮捕失踪者！」
B："¡Presentes!"	B「ここにいる！」
A："¡Treinta mil detenidos-desaparecidos!"	A「3 万人の逮捕失踪者！」
B："¡Presentes!"	B「ここにいる！」
A："¡Ahora!"	A「今も！」
B："¡ y siempre!"	B「これからも常に！」
	※A は代表者／発話者、B はその他全員

- デモや「記憶の場所」の行事などで談話の締めくくりに実施（Twitter や Facebook などでも）
- 呼びかけと応答・・・学校などで出欠を取る際の点呼の形式
- **不在**であることを意味する「失踪者」への**集合的**な呼びかけ（「3 万人の・・・」）
- 不在者の名を呼ぶことのできる（＝誰が不在かを知っている）別の者たちが不在者に代わって応答する＝不在者の現前を訴える
- 失踪者の個別性よりは社会性・共同性（失踪によって断ち切られたもの）の回復が目指される
- 個別性もないがしろにされていない（参加者の多くは具体的な誰かを想起し、誰かの名前や写真を掲げながら参加している） ※個人名を一人ずつ読み上げ、"presente"を繰り返すパターンも。

[6] 「失踪者」について経験的に知らない子どもがそれを見つけて（地面から視線も近いため見つけやすい）、「どうして道に色がついているの？なぜ字が書いてあるの？」と大人に尋ねることが日常生活に「人権」意識が生まれるきっかけであるとされる。そうして問題意識と知識を自ら育んでいった若い世代が成長しその経験をイベントで語ることで、その効果が確認される、という場面が調査中にも見られた（2018 年 2 月）。

→不在者そのものを主要な登場人物とする行事＝儀礼”acto”において、参加者は失踪者という存在を媒介に、「失踪者」になった個人との関係を構築する

･･･形式化された発話や表記を通じて「失踪者」の現前を繰り返し語り訴える「人権運動」･･･

- 死者の状態の生者の側への投影としての喪［エルツ 1980］
  → 残された親族（生者）が失踪者（死者）の状態を再規定するという**逆の投影**
- イデオロギー生産装置としての儀礼［田辺 2010: 212-217］
  → 不在者に呼びかけ、代わりに応答し、不在について想起し･させる「失踪者の親族」の主体化
  → 主権権力によって生み出された「不可知の存在」（例外状態）としてではなく、自己との関係に位置づけ直された「失踪者」のイメージ＝対抗的な「失踪者」イデオロギーを生み出す集合的実践
- 実践の形式化、反復＝「観念の転送･流通過程」･･･「真理化のプロセス」［浜本 2007］

･･･残された親族が失踪者の状態を再規定する喪の儀礼（＝「失踪者」のイデオロギー装置）として「人権運動」を理解できるとして、それは声を持たない失踪者＝他者を生者が代弁すること、不在の他者の個別性を抑圧することにはならないのか、という問いがあり得る[7]･･･

４．弔いではない喪：二つの「回復」の対象

「失踪者」の文脈で儀礼的実践の内外で行為陳述的に――「人権組織××は〇〇を行なった」、「我々は△△する」といった文で――頻繁に用いられる 2 つの他動詞： recuperar と reivindicar

■RECUPERAR

- 辞書上の語義･･･回復する、取り戻す／再利用する、回収する／～の埋め合わせをする
- 語源：ラテン語 *recuperare* ＜*capere*（掴む）
- 目的語： (a) 法治国家･民主主義を recuperar する
  (b) 身元･アイデンティティを recuperar する[8]　cf.「奪回された孫 nieto recuperado」[9]
  (c) 遺体（遺骨）を recuperar する
  (d) 記憶を recuperar する[10]
  (e) その他･･･「私たちは人間を盗まれました。だからせめて、まだ私たちのものであるものを recuperar するのです[11]」

⇒対象に手を伸ばして再び掴み取る――必ずしも元通りではない(b)(c)、決着しない(d)(e)

---

[7] たとえば左地は、死者について語ることを忌避するというマヌーシュの喪が、他者を代弁することの不可能性つまり他者の個別性への「敬意」の現れであることを指摘している［左地 2017］。また守中は、アウシュヴィッツの生還者が体現する「不可能な喪」の現実に立ち、フロイトが理論化した正常な情動としての喪（＝他者の忘却＝自己回復のエコノミー）を拡張する必要性を提起し、大量虐殺された個々の死者の個別性を抑圧しない服喪の可能性をデリダの読解を通じて論じている［守中 2016］。

[8] “Una joven recuperó su identidad”（新聞記事の見出しなど）

[9] 「五月広場の祖母たち」の活動によって乳幼児略取の被害者の身元が判明したことを示す定型表現。

[10] 「秘密収容所に関する歴史的記憶の回復 Recuperación」プログラム（ブエノスアイレス市の条例）など。

[11] 失踪者の子どもたちの会のメンバーの証言、Martorell［2001: 169］からの重引。

■REIVINDICAR（他）

- 辞書上の語義･･･[法]（自分が所有権を有しているものを）要求する／（名誉などを）回復する／（テロなどの）犯行声明を出す
- 語源：*res, rei*（事柄）+ *vindicare*（要求する） ※vindicar は「擁護･弁護」も
- 目的語： (a) **失踪者**を reivindicar する
  (b) 失踪者が身を投じた**闘争**を reivindicar する
  (c) （国家テロリズムの）**記憶**を reivindicar する[12]
  ※「軍事独裁政権を reivindicar する人もいる」･･･批判的な意味
  ⇒名誉回復？と言い切れない――正当性を主張する、正当性の認識を要求する？

使用例：

われわれ「五月広場の母たち」は失踪した子どもたち 3 万人をみな等しく **reivindicar** する。「五月広場の母たち」は、われわれの子どもたちの革命への献身を **reivindicar** し、闘争の旗を掲げる。[Asociación de Madres de Plza de Mayo 2010: 144]

1976 年 3 月 24 日、ジェノサイドにいたるクーデタが起こされ国家テロリズムが打ち立てられた。恐怖は国家によって計画されたものだった。何人も、その犯罪の規模も犠牲者の数を否認できない。国家が、その政治活動を理由に消滅（失踪）させた人間は 30000 人だ。だからこそ。我々は 3 万人の強制失踪者たちの闘争を **reivindicar** する以上、そして 40 年前からかれらは失われたままで、その遺体を **recuperar** する（回収する）ことがまだできずにいる以上、我々は事実否認主義のあらゆる表現を拒絶する！[13]

語義について関係者に説明を求めると･･･

→「ある状況をひっくり返すこと。よくないと思われていたことを、よいことだったんだとひっくり返すこと」（家族会組織のメンバー[14]）

→「意味を変えたり捻じ曲げたりされないようにすること。本来の意味に立ち戻って、“かれらのやったことは良いことだったよね？”と言うこと」「辞書とは違う意味で使う」（人権組織スタッフ[15]）

→「日本にある“忠臣蔵”のストーリーが reivindicación の好例」（元反政府活動家）[16]

⇒名誉を回復すること（結果）ではなく、名誉回復の**要求（行為）自体**を意味する

＋社会･世論（不特定の第三者）に認識の是正を求める ←「犯行声明を出す」という用法

⇒認識是正の対象は不在の他者（要求するものは目的語ではない）･･･行為の宛先は 2 方向

･･･reivindicar は、社会（不特定の他者）に対して目的語（失踪者）を弁護すること

[12] 軍部のクーデタのあった 3 月 24 日「真実と正義のための記憶の日」を国定の祝日とする法案を推し進めた下院議員は、この祝日化を「記憶の reinvindicación」と位置づけている（*Pagina/12*、2006 年 3 月 16 日）。

[13] 2017 年 3 月 24 日の全国一斉デモで人権団体連合が読み上げたスピーチの一部。

[14] 2018 年 3 月 18 日インタビュー。

[15] 2018 年 3 月 20 日インタビュー。

[16] 2014 年 3 月 4 日インタビュー。

５．おわりに

「失踪者」の親族らによる「人権運動」は、独裁国家のイデオロギーが生み出した「失踪者」をそれとして（不可知のもの、非存在として）受け入れることも、またその喪失を嘆き、あきらめ、忘却する（きちんと殺す［エルツ 1980］）という「通常」の死者に対する喪を当てはめることもできないという現実に基づいて構築された「喪」の集合的実践といえる。それは一方で、失われたものの断片を無限に見出して再構成し続け、他方では損なわれた正当性・名誉の回復を訴える、二重の「回復」作業といえる。とりわけ儀礼化（一部は国家儀礼化）された実践は、親族との間で相互に規定される「失踪者」のイメージの再構築・再生産を可能にし、不在者の個別性＝代替不可能性と、その共同性・集合性が同時に反復的に確認される。こうした「失踪者」への服喪の儀礼は、不可逆の出来事を社会に刻み込んで永続化し、死権力の有罪性を告発し続ける対抗的政治実践でもあるだろう。

【参考文献】

- アガンベン、ジョルジョ. 2003.『ホモ・サケル』高桑和巳訳、上村忠男解題、以文社
- 内堀基光 1997「死にゆくものへの儀礼」、『岩波講座文化人類学第 9 巻 儀礼とパフォーマンス』、岩波書店、pp.79-104.
- 内堀基光・山下晋司 2006『死の人類学』講談社
- エルツ、R. 1980 「死の宗教社会学」『右手の優越』吉田禎吾・内藤莞爾他訳、垣内出版、pp.31-128.
- 左地亮子 2017『現代フランスを生きるジプシー――マヌーシュの住まいと共同性の人類学』世界思想社
- タウシグ、マイケル 1996「暴力の文化、死の空間――ロジャー・ケースメントのプトゥマイヨ報告と拷問の解釈をめぐって」、大嶋康典・中田英樹・崎山政毅（訳）、『現代思想』1996 年 9 月号、pp.198-231
- 田辺繁治 2010『「生」の人類学』岩波書店
- 浜本満 2007「イデオロギー論についての覚書」『くにたち人類学研究』2:21-41
- ファン・ヘネップ 2012『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子（訳）、岩波書店
- ボス、P. 2005『「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」――あいまいな喪失』南山浩二訳、学文社
- メトカーフ、P.；R. ハンティントン 1996『死の儀礼――葬送習俗の人類学的研究（第二版）』池上良正・池上冨美子訳、未來社。
- 守中高明 2016『ジャック・デリダと精神分析――耳・秘密・灰そして主権』岩波書店
- [Madres] --Asociación de Madres de Plza de Mayo. 2010. *Historia de las Madres de Plaza de Mayo*. Ediciones Madres de Plaza de Mayo.
- Bayer, Osvaldo y otros, 2013. *El terrorismo de Estado en la Argentina: Apuntes sobre su historia y sus consecuencias*. Ciudad Autónoma de Buenos Aires: Instituto Espacios para la Memoria.
- Crenzel, Emilio. 2008. *La hisotia política del Nunca Más*, Siglo XXI.
- Da Silva Catela, Ludmila. 2001. *No habrá flores en la tumba del pasado*. Edicones al Margen, La Plata.
- Martorell, Elvira. 2001. “Recuerdos del presente: Una reflexión en torno a HIJOS”, en *Memorias en presente: Identidad y transmisión en la Argentina posgenocidio*. complitado por Sergio J, Guelerman. Grupo Editorial Norma; Buenos Aires. pp.133-170
- Mbembe, A. 2003 “Necropolitics.” Trans. L. Meintjes. *Public Culture* 15(1):11-40.